

<メディア批評> なぜ報じない安倍政権の異様な海外メディア叩き

2015年4月24日 上出 義樹

第3次安倍晋三政権と与党自民党による放送内容などへの異様な政治介入が物議を醸す中、ドイツの保守系有力新聞フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥンク（FAZ）の前東京特派員カーステン・ゲルミス（Carsten Germis）記者が、安倍政権の歴史認識に批判的だった在任中の記事に対し加えられた日本政府からの執拗な「圧力」と「侮辱」的言動を、日本外国特派員協会の会報「ナンバーワン新聞」4月号のコラムで赤裸々に告白。穏健な欧州メディアの個別の記事にまで干渉する同政権の常軌を逸した海外メディア叩きに、インターネットなどで批判が飛び交っている。ところが、一般の新聞やテレビはなぜか、この問題を報じていない。安倍政権に腰が引けているとしか思えないこうした大手メディアの報道姿勢もまた、ネット上などでやり玉に挙げられている。

首相に批判的な外国メディアに「反日」のレッテル

ゲルミス記者のこのコラムは3月末の帰国に当たり英文で寄稿。まず、5年前の着任時と現在を比べて、「歴史修正主義者」の安倍首相の登場で「社会の空気は大きく変化し、別の国になってしまった」と感想を述べ、「日本の指導者層の考え方と海外メディアの報道内容とのギャップが深まり、日本で仕事をする外国人ジャーナリストたちの困難が増している」と憂慮している。エネルギー政策やアベノミクスの問題点、改憲などについて外国メディアの取材に丁寧に応じてくれる「政府の有力者はほとんどおらず、「首相の新しい構想を批判する者はだれもが『反日』（Japan basher）」と呼ばれる」と、同記者は指摘する。

ドイツ有力紙の特派員が日本政府の圧力と暴言に怒りのコラム

このコラムによると、ゲルミス記者自身にも2014年以降、外務省などからさまざまな形で「圧力」が加えられた。とくに、安倍政権の「歴史修正主義」に批判的な記事がフランクフルト紙に掲載された直後、日本のフランクフルト総領事が同紙の本社を訪れ、編集幹部に「中国がこの記事を反日プロパガンダに利用している」と苦情を申し入れた。対応した編集幹部は「記事のどの部分が間違っているのか」と尋ねたが、返答はなく、「金が絡んでいると疑わざるを得ない」「中国へのビザ申請を承認してもらうためではないか」との言葉が総領事から返ってきたという。この総領事の発言に対し、「これは私と編集者、本紙全体に対する侮辱である」「私は中国に行ったことなどない」とゲルミス記者は憤る。

外務省は総領事の「侮辱」発言を相手の「誤解」と釈明

このコラムは、安倍政権と海外メディアの軋轢を知る上で貴重な一文だが、それに加えて、もし、日本の外交官がゲルミス記者や同紙に対し、「侮辱」的な言葉を発していたのなら外交上も看過できない問題である。そこで、私（上出）が4月16日、外務省に事実関

係を取材したところ、翌 17 日に広報担当の報道課から、1 枚の回答文書がファックスで送られてきた。回答の文面を要約すると、「日本（政府）は報道の自由を最大限尊重している。他方、政策広報発信の主体として、報道機関による事実関係の誤りや誤解に基づく記述に対して、申し入れを行う場合もある」と前置き。その上で、「ゲルミス記者の記事に対しても、駐独（日本）大使から反論投稿を行い、また、在フランクフルト総領事からも申し入れを行った」と、同紙への「働きかけ」があったこと自体は認めている。

ただ、「総領事は、日本政府の歴史認識や歴史問題に係る取り組みについて説明を行ったが、（ゲルミス）記者に対する中国からの資金提供や査証取得の便宜を疑うような発言はしていない」と説明。ゲルミス記者がコラムの中で「私や本紙に対する侮辱」としている総領事の発言については、「（同紙側）の誤解に基づくもの」と、否定している。さらに、この「侮辱」発言について、外務省は、「すでに F A Z 本社との間で誤解は解消されている」として、“解決済み”との見解を示している。

「暴言」問題が解決済みかどうか独紙の記者に問い合わせ中

私に送られてきたこの外務省の回答文書の内容からも、ゲルミス記者が「攻撃」や「圧力」と感じるような総領事らの言動があったことは十分に想像できる。ただ、「金が絡んでいる」などの「侮辱」発言について外務省側は、相手の「誤解」と反論しているが、この部分についてゲルミス記者はコラムの中で、「総領事のコメントに対し私が公式に抗議した際に告げられたのは、それは『誤解』ということだった」と記述するなど、「不満」とも受け取れる表現をしている。実際に「解決済み」なのかどうかは、23 日現在、ゲルミス記者にメールで問い合わせ中である。

ドイツ紙の問題を取り上げない日本のマスコミに識者から嘆きの声も

私を知る限り、ゲルミス記者のコラムは 4 月 10 日付の内田^{たつる}樹・神戸女学院大名誉教授のブログや 14 日付「日刊ゲンダイ」、17 日付「しんぶん赤旗」のほか、一部の週刊誌などが取り上げている。しかし、全国紙などはなぜかこの問題を「無視」しており、外務省報道課によると、4 月 17 日の時点で私以外の記者から取材や問い合わせはないという。

ゲルミス記者のコラムの全文を日本語に訳し、自らのブログで紹介した内田名誉教授は、「日本国民のほとんどは海外メディアが日本をどう見ているかを知らない。日本のメディアが報じないからである」「日本で何が起きているかを知りたければ海外のメディアを読む（しかない）」、「そんなことまで言われて日本のジャーナリストは平気なのか」と指摘。真実を伝え、権力を監視する使命を果たさない日本のメディアを嘆いている。

（かみで・よしき）北海道新聞社で東京支社政治経済部、シンガポール特派員、編集委員などを担当。現在フリーランス記者。上智大大学院博士後期課程（新聞学専攻）在学中。